

本学の栄養教育実習の現状と課題

久我周夫

Current Status and Issues of Nutrition Education Training at Our University

Kaneo KUGA

Abstract

Nutrition education training is an important part of nutrition teacher training. The following surveys regarding nutrition education training were conducted.

Survey 1: An awareness survey for students aspiring to be nutrition teachers.

Survey 2: An interview survey conducted after nutrition education training.

Survey 3: A survey asking students their impressions of nutrition teacher training.

It is important to clarify the significance of nutrition education training from students' perspective. I would like to use the results of these surveys to reform nutrition education training. The period of nutrition education training is short. Therefore, planning must be done in order to make effective use of this short training period. And this lesson planning needs to be explained to the university. There should be discussions about the training with the people in charge of the training school. Efforts should also be made to enhance the curriculum for nutrition education training at the university.

Keywords: Nutrition education training 栄養教育実習,

Nutrition Teacher 栄養教諭, Nutrition Education 食に関する指導,

Lesson planning 授業づくり, Learning guidance plan 学習指導案

1. 本学の栄養教諭の養成について

本学食物栄養学科では、栄養教諭制度が誕生した2005（平成17）年度から栄養教諭2種免許の取得を目指した栄養教諭の養成が始められた。

1.1. 履修科目

栄養教諭としての職務内容を適切に行うための資質能力の基礎として、栄養に関する専門性と教職に関する専門性を身に付ける必要があることから、本学では以下の科目を開講している。

表1. 栄養教諭2種免許取得のための課程

栄養に係る教育に関する 専門教育科目(2単位)	学校栄養教育(2単位)
教職に関する専門 教育科目(15単位)	教育心理学(2単位) 教職概論(1単位) 教育課程論(1単位) 教育原理(2単位) 生徒指導・教育の理論と方法 (2単位) 特別支援教育論(1単位) 教育の方法と技術(1単位) 道徳・総合的な学習の時間・特別活 動の理論と方法(1単位) 教職実践演習(栄養教諭)(2単位) 栄養教育実習(学内)(1単位) 栄養教育実習(学外)(1単位)

1.2. 栄養教諭免許の取得人数と学校への
就職状況について

表2は、入学時の履修人数と免許取得人数
を表している。

「免許取得人数」は入学年度で集計してい
るため(2019・2020年の[]は見込み人数)
となっている。

また、()はその内の科目等履修生の人
数を表しているが、2012年以前については
不明である。

表2. 栄養教諭免許の取得人数

入学年度	1年履修人数	免許取得人数	入学年度	1年履修人数	免許取得人数
2005	18	12	2013	29	15 (1)
2006	37	18	2014	22	15
2007	17	4	2015	30	8
2008	37	21	2016	32	15 (1)
2009	22	11	2017	34	19 (2)
2010	25	14	2018	26	12
2011	30	21	2019	20	[20]
2012	14	8 (1)	2020	26	[12]

2019, 2020の取得人数は見込み

下の表は最近の学校への採用者である。栄
養教諭は現在必置の職ではないため、募集人
数も少なく、競争率も高い。そのため講師と
して採用後、毎年、採用試験にチャレンジし
て正式採用されるというケースが多い。表の
項目に「講師として採用」とあるが2016年
は1名が正式採用だった。

就職する際に栄養教諭免許が必要となるの
は現在のところ栄養教諭として正式採用され
るか、講師として採用されるかである。(一
部こども園でも必要などころがある様だが、
本学での実績はない) 栄養教諭免許が活用さ
れる割合は低いといえる。

表3. 最近の学校への就職状況

卒業年月	免許取得人数	講師として採用	合格者	%
2013. 3	21	0	1 (2016)	0
2014. 3	8	0		0
2015. 3	15	1		7
2016. 3	15	5(内正式採用1)	2 (2016,2020)	33
2017. 3	8	2	1 (2019)	25
2018. 3	15	8	2 (2020)	53
2019. 3	19	2	1 (2021)	11
2020. 3	12	1		8

合格者とは現役合格者と卒業後に受けた採用試験
で合格し、正式採用された者(採用年度)

1.3. 栄養教育実習について

2004年(平成16年)に栄養教諭制度創設
にかかる「学校教育法等の一部を改正する法
律」が施行された⁽¹⁾。その留意事項の4で
は「栄養教育実習の具体的な内容としては別
紙2のものが想定されること」として栄養教
育実習の具体的な内容が記載されている。

- | |
|--|
| <p>(1) 事前及び事後の指導 (1単位)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○事前指導：意義や目的、心構え等 ○事後指導：実習の反省、今後の課題の
明確化等 <p>(2) 学校での実習 (1単位)</p> <ul style="list-style-type: none"> ○指導教諭等からの説明 |
|--|

- ・学校経営・校務分掌の理解
- ・サービス等
- 児童・生徒への個別的な相談、指導の実習
 - ・指導、相談の場の参観・補助等
- 児童及び生徒への教科・特別活動等における指導の実習（指導の参観、補助）
 - ・学級活動及び給食の時間・教科等・給食放送、配膳、後片付け・児童生徒集会、委員会活動、クラブ活動・指導計画案、指導案の立案作成、教材研究等
- 食に関する指導の連携・調整の実習（参観、補助）
 - ・校内における連携・調整
 - ・家庭・地域との連携・調整

本学では、この文部科学省による具体的な内容に基づいて、栄養教育実習の内容及びカリキュラムを策定している。

(1) 事前及び事後の指導について

事前指導では、栄養教育実習の意義・目的、栄養教育実習の心得、学校組織の理解とコミュニケーション、実習目標・研究課題、栄養教育実習記録の書き方、指導案の作成、指導案に基づく模擬授業等を行っている。

事後学習では実習を通じた成果と課題について個別に面談をして、問題点の整理と今後の課題の明確化をはかっている。さらに1年生を対象に栄養教育実習報告会を開き、その際には実習の概要や実習授業の指導案・板書計画・細案・ワークシートなどを綴じた冊子を作って配布している。この報告会は、2年生にとっては成果と課題の再確認の機会であり、1年生にとっては2年生の話や報告会の冊子をもとに栄養教育実習への意識付けができ、先輩たちの具体的なアドバイスが聞ける貴重な時間となっている。

(2) 学校現場での実習について

栄養教育実習の目的は、栄養の専門職とし

て教職を希望するものが、大学で取得した知識・技術を基礎として、教師に求められる資質・能力を身につけるために、学校の現場で実践を通して集中的に研究するものである。しかしながら、栄養教育実習は5日間（大学設置基準第21条第2項の規定による）という短い期間しかない。この期間で最大限の効果を上げるためには、実習授業の授業づくりについてはそのほとんどを大学で仕上げておく必要がある。貴重なこの5日間は、学校現場での実践を通じた学校と子どもの理解、そして実際に子どもを目の前にした授業の展開に費やされるべきだと考えるからである。

(3) 本学での栄養教育実習のための授業づくりについて

以上のことから本学では1年次から計画的に授業づくりに取り組んでいる。

ア) 「めあて」の重要性に気づかせる

1年生後期の「教育の方法と技術」「道徳・総合的な学習の時間・特別活動の理論と方法」の中で学生たちは栄養教育実習を想定した食育の指導案を立てる。それまでに簡単な指導案についてはいくつか経験しているが、本格的なものを書くのはこれが初めてである。その際に意識させるのは、授業の「めあて」と「題材設定」である。子どもたちがこの1時間で何ができるようになるのか、自分が何を伝えるのか、もっといえば子どもたちをどう変えるのかを意識することが重要であり、そのためには学生自身がしっかりと勉強し、問題意識を持つことが肝心である。テーマは栄養バランスであったり、子どもの基本的生活習慣に関わる朝ごはんの問題であったり、感謝や食物アレルギーなど学生たちが既に学んでいることである。そして「題材の設定」にはなぜこの題材を選んだのか、学生の持つ問題意識や課題について詳しく書く。そのことが授業の目的をしっかりとつかむことにつながってくる。この時点では、この「めあて」を達成させるためにどのような学習活

動を持ってくるのかの詳細については求めないが、この時点ですでにしっかりとしたイメージを持つ学生も現れてくる。

イ) 初めての指導案づくり…授業づくりの手がかりの提示と留意点

子どもたちに考えさせたり、話し合いをさせたりする場合には、その手がかりとしての資料は必ず用意しておかなくてはならない。このことは実習授業で学生たちが授業する際に注意しなければならない点でもある。

学生が授業づくりに臨む場合も同様である。この資料としては、先輩たちの栄養教育実習報告会の冊子（実習で使った指導案や細案、ワークシートなどを載せたもの）や、「食育の視点」ごとに分類した指導案のデータベース、食育関係の本や絵本などをたくさん用意した。学生たちはそれらの資料を見ながら題材を選び、指導案を書くための参考にしている。

ここでの留意点は、はじめは大まかな流れも真似でいいということである。はじめから全くのオリジナルをねらう者がいるが、たいてい場合はうまくいかない。子どもがこの授業で何ができるようになるのかという「めあて」さえしっかり持っていれば、ただの真似にはならない。ベースになる指導案を見つけたら、大まかな流れをたて、次にイメージを広げるために授業のシナリオ（細案）をつくっていくのである。実際は授業する相手を思い浮かべながらつくっていくが、これはもう少し先の話である。

ウ) 細案の作成と「予想される子どもの反応」

学習指導案作成（以下、指導案）については、次の2点に注目させている。

一つ目は大まかな流れが決まったらまず、細案を立てること。これはその方が授業全体のイメージがつかみやすいからである。もちろん慣れればどちらが先でも良い。その後、細案の重要な発問を手がかりにその他の部分は省いて学習指導案を仕上げる。この方法で指導案を書くことやたらと長い指導案になるこ

とがある。初めのうちはそれでも良いが、ここで注意すべきは「めあて」に結び付く重要な発問である。

二つ目は指導案（細案）には必ず「予想される子どもの反応」を入れることである。これについての留意点は「はい、いいえ」や「好き、嫌い」などその場の受け答えを「予想される子どもの反応」と勘違いする学生がいることである。ここに書かれるべきは指導者（学生）が意図する反応と、こういう間違いがあるだろう、という指導者（学生）の予想である。このことで発問が洗練され、子どもの支援の手立てが事前に見えてくるのである。

エ) 「めあて」を達成させるための学習活動について

2年生の前期の「栄養教育実習（学内）」の前半（事前指導）では1年生の後期につくった指導案を基に（題材の変更も可）指導案を練り直していく。ここでは、「めあて」等の確認後、「めあて」の達成のために中心となる学習活動について具体的に考える。この部分はその授業の山場になるはずである。ここにどのような学習活動を展開するかによって、「めあて」に対する子どもの理解や考えの深まりが変わってくる。この段階で一番力を入れるべき点である。さらに導入やまとめについて検討し、もう一度、細案、指導案を完成させ、模擬授業を行う。

オ) 模擬授業で「子どもと授業をつくる」ことを意識させる

模擬授業をする場合、ただ段取りの確認をするだけでは意味がない。指導者（学生）がいくら強い問題意識を持っていてもそれを子どもに伝えるためには、常に子どもたちの様子や反応を見ながら授業を進めていく必要がある。そのための方策のひとつは机間指導である。机間指導の「把握」「支援」「発展」の3つの役割の実行である。机間指導をしながら現在の状況を把握し、困っている子どもを見つけて支援し、いい意見や方法をもって

る子どもを発見して（いいところ探し）全体で共有する（発展）。この机間指導は子どもと授業をつくることにつながる。このことを意識しながら模擬授業をすることは授業づくりとして大切なことである。

カ) 個別指導の5つのステップ

次の段階は個別指導である。5つのステップを用意して学生一人ひとりの実施時期や個々の進度に合わせて指導している。

- ①めあてと学習活動の整合性と授業の流れについての検討（学習指導案、細案）。
 - ②教材研究、ワークシート、板書計画の見直し、作成。
 - ③黒板の掲示物や教材の作成。
 - ④模擬授業2回（通し → 課題の解決 → 通し）※1回目の模擬授業で課題を見つけそれを解決した後、再度模擬授業を行う。
 - ⑤学習指導案・細案の整理、再検討、完成。
- 下は個別指導の予定表である。

表 4. 実習授業に向けた個別指導予定表

実 習 日	名	8/17(月)	18(火)	20(木)	24(月)	25(火)	26(水)	28(金)	31(月)
8/31	A	①②は 7月中 に済 ③から	→	※①	→	※②	→		
	B			※①		※④	→		
	C			※①		2	※②	→	
9/14	D	同上③						→	
9/17	E		①			※1(昼 から)		→	
9/14	F		①				※①	→	
9/7	G	同上③						※1(昼 から)	→
	H	同上③					※①	→	
	I	①						→	
	J	①						※①	→
	K	①						※①	→
9/14	L					②		→	
	M					②		→	

キ) 学生の授業づくり実習校との関係

学生は栄養教育実習の約1ヶ月前に実習校

を訪問して事前打ち合わせを行う。事前打ち合わせではあらかじめ作成した指導案を持参し、研究授業で行いたい題材と学年の希望を伝えている。学生が持参した指導案については受け入れてもらえる実習校もあれば、全く別の題材を指示されるところもある。これらのことについては、実習校の体制や栄養教諭、指導担当教諭によって様々であり、実習校の食育に対する取り組みの温度差も関係している。学生にはそのあたりの事情について日頃からよく言い聞かせてはいるが、それでも不安を抱えている学生には緊張の日々が続く。4月以降に挨拶の電話や問い合わせを何度かしているが、事前打ち合わせで初めて学年や題材が伝えられる場合が多く、一部では実習が始まってから伝えられるケースなどもある。想定していた学年や題材が違う場合、急遽、指導案を作成し直すことになる。実習校との打ち合わせ等については、個別指導の時間の捻出と共に課題として残っている。

これまでみてきたように、栄養教諭養成における栄養教育実習には重要な教育的効果があるといえる。しかし、小中学校教諭の実習期間の4週間と比較すると圧倒的に少ない1週間という期間である。この中で効果を上げていかなければならないのである。

本稿では栄養教育実習について教職課程を履修する学生の意識調査と栄養教育実習実施後の聞き取り調査や自由記述の結果を検討していく。そして学生から見た栄養教育実習の意義を明らかにすることを通じて、今後の養成段階における栄養教諭実習の改革に資する基礎資料を得たいと考える。

2. 方法

本稿では本学食物栄養学科2年生対象に、質問紙調査と聞き取り調査を実施した。一部比較のために2018年の教育現場で働く卒業生に対する調査結果⁽³⁾を使用した。

2.1. 調査対象者

本学食物栄養学科2年生の2020年度の栄養教育実習を行う20名を対象とした。

2.2. 調査方法と時期

調査1、調査2

質問紙による調査、無記名

1回目…1年次の9月

2回目…2年次の6月

3回目…2年次の10月

調査3 面接調査と自由記述 実習後

2.3. 調査項目

調査1

上村・森田(2014)⁽²⁾を参考に本学の実態に合わせ、下記の通り再構成した。

- ①修得したい資格 ②就きたい職業
- ③就きたいと思った時期 ④いつ知ったか
- ⑤情報源 ⑥資格を取りたいと思った時期
- ⑦資格をとりたい理由 ⑧今、栄養教諭になりたいという思いについて

調査2

比較対象として久我(2018)⁽³⁾の調査結果を使用した。いくつかの選択肢の中から5つ選んで順位をつけさせた。

- ⑨栄養教諭志望の動機や、やりたいこと
- ⑩栄養教諭に必要な資質・能力
- ⑪大学の養成課程で取り入れるべき教育

調査3

- ①栄養教諭の配置 ②指導担当者の内訳
 - ③ベースの学級があるか ④授業の参観
 - ⑤実習授業について ⑥満足感(5点満点)
- 自由記述「栄養教育実習を終えて」

3. 結果

3.1. 調査1について

調査1の結果を表5に示す。①栄養教諭の免許志望はどの時期も85%以上であるが、実習後(3回目)が95%と高くなっている。②就きたい職業について栄養教諭は約15~20%であった。就きたい職業のその他の内訳(3回目)は管理栄養士(4年制大学への

編入)が多く、調理師、一般企業、悩んでいるとなっている。③栄養教諭などの職業に就きたいと思った時期は、入学後(35%)が多く、高校生(30%)と続く。④栄養教諭という資格を知ったのは高校3年生(55%)が一番多く、次いで大学入学後(30%)である。⑤具体的に栄養教諭免許を取得したいと思った時期は、高校3年生(50%)、入学後(40%)でありこれらの時期がほとんどを占めている。⑥免許を取得したい理由は就職の選択肢が広がる(40~55%)、とれる免許なら何でも(40~45%)、これに食に関する教育をしたいが続くが20~40%とやや幅があった。⑦就職については、就職先のひとつ(35~45%)、なれたらいい(20%)、他がなければなってもいい(10~15%)であり、絶対なりたいは5%であった。

表5. 調査1の結果

項目	1年次9月	2年次6月	2年次10月	
①本学で取得したい資格は何ですか	(1)栄養士	100	100	100
	(2)栄養教諭2種	90	85	95
	(3)フードスペシャリスト	40	35	25
	(4)その他	5	5	0
	(5)知らない	0	0	0
②就きたい職業は何ですか	(1)栄養士	50	45	50
	(2)栄養教諭	15	20	15
	(3)その他	35	35	35
	(4)小学校	15		
	(5)中学校	15		
③その職業に就きたいと思うようになったのはいつ頃からですか	(1)高校	30		
	(2)大学(入学後)	35		
	(3)その他	10		
	(4)中学3年	5		
	(5)高校2年	5		
④栄養教諭という資格はいつ知りましたか	(1)高校2年	0		
	(2)高校3年	55		
	(3)社会人の時	5		
	(4)入学後	30		
	(5)入学後	25		
	(6)高校の先生	15		
⑤それはどのようにして知りましたか	(1)進路に関する情報	30		
	(2)本学進学説明会	5		
	(3)マスメディア	0		
	(4)本学ウェブサイト	30		
	(5)入学前ガイダンス	5		
	(6)職場	0		
	(7)オープンキャンパス	5		
	(8)その他	5		
	(9)高校2年	5		
	(10)高校3年	50		
⑥免許を取りたいと思ったのはいつですか	(1)入学後	40		
	(2)職場	5		
	(3)その他	0		
	(4)取れる資格なら何でも	45	40	40
	(5)食に関する教育をしたい	40	20	35
⑦なぜ免許を取りたいと思ったのですか	(6)栄養士の資格だけは就職が厳しい	0	5	0
	(7)就職の選択肢が広がる	40	55	40
	(8)教員にならなかった	0	10	0
	(9)その時	0	5	0
	(10)就職先の一つ	35	35	45
⑧今、栄養教諭になりたいという思いはどれくらい	(1)絶対なりたい	10	10	15
	(2)他がなければなってもいい	30	30	15
	(3)資格だけ欲しい	5	5	5
	(4)絶対なりたい	20	20	20
	(5)なれたらいい	20	20	20

3.2. 調査 2 について

調査 2 では、栄養教育実習修了後（以降実習後）の学生と現在栄養教諭や講師として教育現場で働く卒業生（経験 2 年以上）の調査（久我（2018））と比べた。

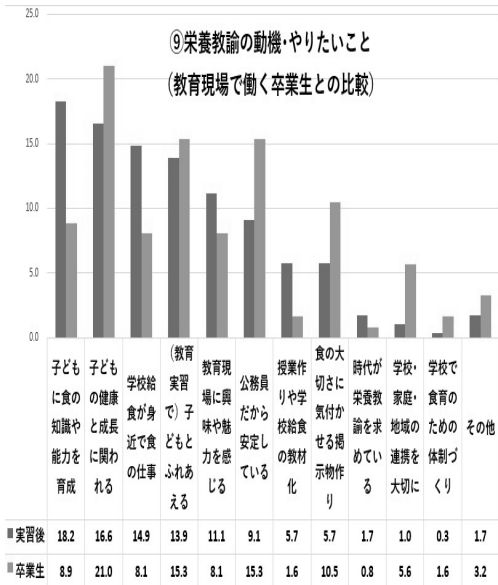


図 1. ⑨栄養教諭の動機・やりたいこと

図 1 の動機・やりたいことについて、学生は子どもに食の知識や能力を育成（18.2）、子どもの健康と成長に関わる（16.6）、学校給食が身近で食の仕事だから（14.9）、子どもとふれあえる（13.9）のポイントが高かった。一方教育現場で働く卒業生（以後卒業生）は、子どもの健康と成長に関わる（21.0）、子どもとふれあえる（15.3）、公務員だから安定している（15.3）が高かった。

図 2 の求められる資質・能力については、学生は、他者と連携協力する技能（15.7）、子どもに対する深い愛情（14.1）、コミュニケーション能力（13.7）を挙げているのに対して、教育現場で働く卒業生はコミュニケーション能力（22.0）、教科等（栄養）に関する専門知識（20.3）、豊かな人間性（13.8）を挙げている。

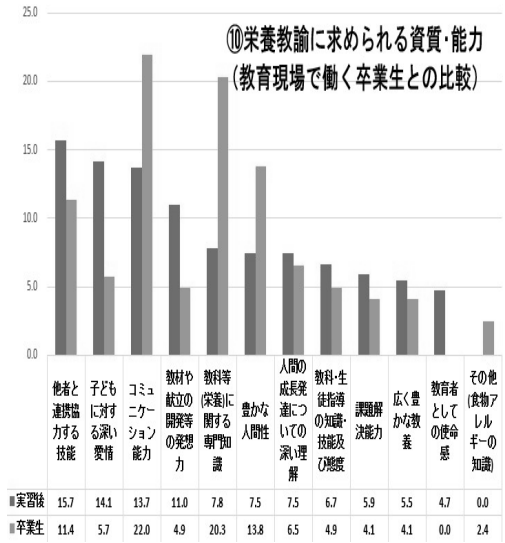


図 2. ⑩栄養教諭に求められる資質・能力

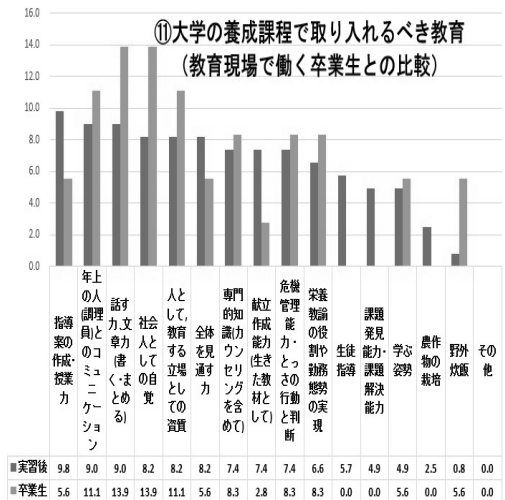


図 3. ⑪大学の養成課程で取り入れるべき教育

図 3 の大学の養成課程で取り入れるべき教育に関して学生は、指導案の作成・授業力（9.8）、年上の人（調理員）とのコミュニケーション（9.0）、話す力、文章力（書く・まとめる）（9.0）をあげ、卒業生は、社会人としての自覚（13.9）、話す力、文章力（書く・まとめる）（13.9）、人として、教育する立場としての資質（11.1）、年上の人（調理員）とのコミュニケーション（11.1）を挙げている。

る。

3.3. 調査3について

実習後の調査である。本稿執筆段階で1名が実習を終えていないので集計は19名でおこなった。実習校の内訳は小学校17校、中学校2校であった。

①実習校の栄養教諭の配置について

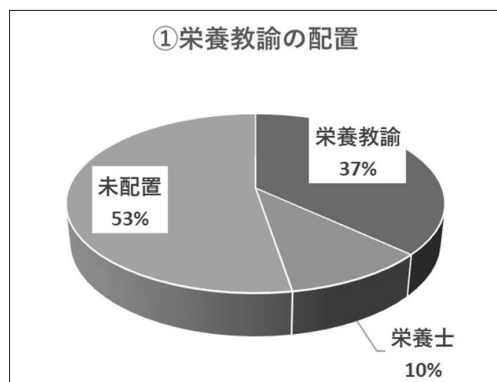


図4. ①栄養教諭の配置

栄養教諭が36.8%、栄養士・管理栄養士が10.5%、未配置が52.6%だった。

②指導担当の内訳

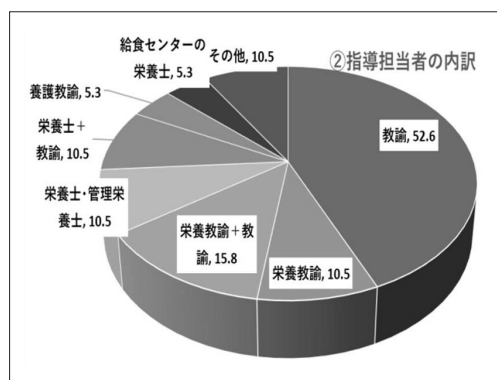


図5. ②指導担当の内訳

教諭が52.6%、栄養教諭が10.5%、栄養教諭+教諭15.8%という結果であった。その他は校務分掌の給食担当等である。

③ベースの学級があるか

ベースの学級とは、ひとつの学級に配属さ

れることで、授業参観だけでなく、登校から下校までの学級における参観が可能になる。ベースの学級ありは84.2%、なしは15.8%であった。

④授業の参観について

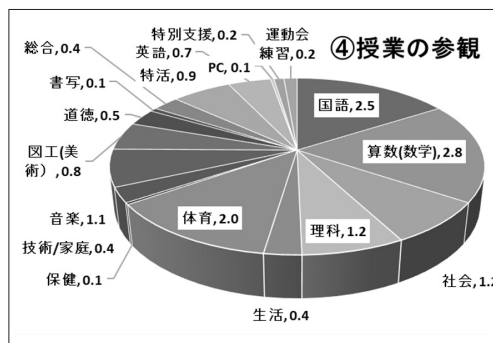


図6. ④授業の参観

授業の参観で一番多いのは算数・数学(平均2.8時間、以下2.8と表記)であり、国語(2.5)、体育(2)、社会(1.2)、理科(1.2)、音楽(1.1)、特別活動(0.9)、図工(0.8)などと多岐にわたっている。

⑤実習授業について

ア) 実習授業の学年

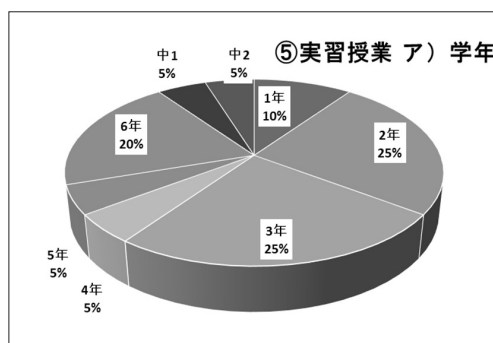


図7. ⑤実習授業について

2年生(25%)、3年生(25%)で約半数を占めるが、6年生(20%)、1年生(10%)と続く。

イ) 実習授業の教科・領域

教科領域では圧倒的に特別活動(学級活動)が多い(89%)他は、家庭科(11%)だった。

ウ) 食育の視点

実習授業の食育の視点では食事の重要性 (42.4%) と心身の健康 (39.4%)、次いで食品を選択する能力 (9.1%)、社会性 (6.1%)、感謝の心 (3.1%) となっている。食文化を食育の視点にしたものはなかった。

3.4. 調査3 自由記述について

自由記述「栄養教育実習を終えて」については、下の3つの観点ごとにまとめた。

- ・教育現場でしかできない体験に学ぶ
- ・理論と実践のギャップから学ぶ (教育理論や指導技術の獲得)

- ・教育活動を通じた自己の再発見と成長の場

(1) 教育現場でしかできない体験に学ぶ

- ・先生と子どもとの関係。信頼関係。実習の間、自分の席の隣にいた勉強の苦手な子どもが、自分の授業の時には手を挙げてくれた。
- ・どの先生も子どものことを思いやっていることが感じられた。
- ・支援のクラスにずっといた。はじめはなかなか話もできなかったが、授業や給食の時間を通して多くの話ができるようになった。一人ひとりみんな違いそれぞれにあった指導が必要だった。クラスも一つ一つ雰囲気の違いそれぞれのクラスにあった授業が必要だと思った。
- ・先生と児童の信頼の大切さ、クラス全員と繋がれているか、落ち着いていこう (担任の言葉) などたくさんの大切なことに気がついた。教師の児童に対する接し方、子ども同士の気遣いなどたくさんのことを感じとることができた。
- ・実習はしんどかったけど楽しかった。一週間はあっという間だった。子どもたちとのドッジボール、指導案の修正や本番のために夜遅くまで真剣に付き合ってくださった先生方、この実習を通して栄養教諭になりたいという気持ちが強くなりました。
- ・実際に小学校に行くことで、学校現場でし

かわからないことが多く学びました。

(2) 理論と実践のギャップから学ぶ (教育理論や指導技術の獲得)

- ・実際に授業をしてみると子どもの反応にどう応えるか、子どもに考えさせる時間の配分などあらかじめ予想していないといけない。わかっているつもりだったが、実際にやってみると難しいことがわかった。
- ・わかりやすい授業の裏に多くの準備が必要だとわかったが、生徒の反応が良かったとき授業をして良かったと思うことができた。
- ・参観した授業では何を理解させ、何を考えさせるのが明確だった。話をさせるときはペアになって話し合い、発表する。一人の子が疑問に思ったことをクラス全員で共有して考えさせる。話が脱線しても授業と関連付けて理解しやすいように説明していた。模擬授業のとき、子どもたちをどう楽しませるか、興味を引きつけるかなどについてアドバイスをもらった。
- ・同じ指導案で授業をしているのにクラスによって反応が違う。クラスに合わせた授業をしないといけないと思った。
- ・発問の仕方やそのタイミング、板書、授業の展開など、模擬授業などではわからないたくさんのことを勉強させてもらった。
- ・自分の持っていった指導案が先生方の指導で、より子どもに合わせたものになっていくことで、自分が考えていたやり方にプラスして子どもたちに分かりやすく伝えることが大切だということがわかりました。

(3) 教育活動を通じた自己の再発見と成長の場

- ・授業を聞いてくれない子がいたらその子を責めるのではなく、自分との信頼関係を築くことが大切なんだとわかった。
- ・自分は子どもが好きなんだ (ということがわかった)。たくさんのことを教えてあげたいけど自分は文章を組み立てるのが苦手

であることがわかった。苦手なことのある子に寄り添いたい。だから本をたくさん読んで文章を組み立てたり、ボキャブラリーを増やしたい。たくさん経験をして多くの知恵をつけていきたい。

- ・ 持っていった指導案は1年生には難しいなど色々指摘され、たくさん見なおしをし、色々修正したので時間通りにスムーズにでき、児童の反応もとても良く授業をしやすい雰囲気でもうれしかった。今まで何をしても自信がなかったのにこの5日間の実習を通して自分に自信をもつことができた。
- ・ この実習を通じて私自身が技術や知識を身につけないといけないと思いました。これからの学生生活で目標を決め、子どもたちのように努力する力を身につけようと思いました。
- ・ 教師は目指してはいなかったけど、子どもたちが主体になる授業をやろうとがんばった研究授業後にきっと良い先生になれるよと言ってもらってうれしかった。マイナスのイメージから始まったこの実習は、人としてすごく成長できたし、良い経験になったと心からいえるものになった。
- ・ 大好きな子どもたちの45分を私の努力不足、準備不足で無駄にしたかも知れない。周りの優しい先生たちに助けられているんだということを本当にわかる機会になりました。コロナのおかげで3週間実家にて、地元のよさを改めて感じました。

4. 考察

4.1. 実習前と実習後の調査の比較から

調査1からは、本学栄養教諭免許志望の学生の姿が見えてくる。免許を取得したいと思った時期は高校3年生か入学後である。取得したい理由は就職の選択肢が広がる、または取れる免許は何でもと考えている学生が多いが、それに続いて食に関する教育をしたい

という学生もいる。就職については、就職先のひとつ、なれたらいいと、なりたいけど採用の状況を考えると諦めの方が先にたつもの、資格だけで良いと割り切っているものもいる。

しかしこの「資格だけでいい」も実習後には半減している。このほかにも栄養教諭の免許志望や、子どもとのふれあいの項目(調査2)など、実習前と実習後では顕著な差が見られ、栄養教諭という仕事に興味を持ったことがわかる。それは調査3の自由記述からも窺える。

栄養教育実習が学生に与える影響は明らかである。

4.2. 教育現場で働く卒業生との比較から

動機ややりたいことで、学生は「子どもに食の知識や能力を育成」、教育現場で働く卒業生は「子どもの健康と成長に関われる」を挙げている。求められる資質・能力では学生は「他者と連携協力する技能」、卒業生は「コミュニケーション能力、専門知識」を重視している。また、養成段階で取り入れるべき教育で学生が1番に挙げている「指導案の作成・授業力」に関して卒業生の順位はかなり低い。これは授業力についてはそんなに必要ないということではなく、仕事の比重の問題なのだと考えられる。

もう一つ目立つのは学生の回答には、ばらつきが多いのに対して、卒業生のそれは大切なくつかを共通して選んでいることである。これは仕事をしていく中で栄養教諭共通の価値観を見いだすことができているからであろうと考えられる。

今後、教育課程の中で、社会人や教育者としての自覚やコミュニケーション能力・専門知識の大切さについてしっかりと育成していくことが再度確認できた。そして何よりも、栄養教諭は子どもの健康と成長に関われる仕事なのだという誇りを大切にしているのだということを伝えていきたいと考えている。

4.3. 栄養教育実習の課題

(1) 実習校における栄養教諭の認識度

栄養教諭は必置の職ではなく、各校に必ずいるわけではない。そのため、栄養教諭がない学校、あるいは栄養教諭と仕事をしたことのない教職員もいる。今回でも実習校の53%は未配置だった。教職免許における教育実習の依頼は、実習生の母校に対して行われるのが一般的であり、本学の栄養教育実習も同様に依頼を行っている。ところが依頼に行くと、うちには栄養教諭がないからと断られるケースが毎年ある。その度にこちらから丁寧に説明するが、依頼校に栄養教諭が在籍している場合にはそんなことはまずない。今回はそのことで実習中に学生が困ったという報告はなかったが、未配置校については、学生に対する栄養に関わる専門的な指導助言は期待できない。そこで、大学における事前指導の充実を図ることが重要である。また、栄養教諭免許取得に関わる担当教員が課題を共有し、学生が意欲を高め、自らの資質向上に向けて努力ができるよう、その過程の具体的な内容を整理し体系的、系統的に行っていくことが必要である。

(2) 実習校の理解や協力が得られる環境や体制づくり

1.3.キ)でも述べたように5日間を学生にとって有意義な栄養教育実習にするためには、実習授業の授業づくりについてそのほとんどを大学で仕上げておく必要がある。そのためには実習校の担当者との話し合いが必要であるが、担当者も忙しく、なかなかうまくいっていないのが現状である。上村・森田(2014)⁽²⁾の広島地区栄養教育実習連絡協議会のような組織があればと思うが、すぐにはできない。今のところは地道に連絡を取っていくしか方法はない。実習授業だけではなく、例えば調査3の③ベースの学級があるかについて

子ども理解のためには授業参観だけではな

く、登校から下校までの学級における指導の参観が必要である。休み時間の子どもの様子もよくわかり、いっしょに遊んだりすることで子どもの理解度は大きくあがる。実習生の栄養教育実習全体の満足度を比較すると、ベースの学級ありの平均は5点満点中4.4、一方ベースの学級なしの場合は3.3であった。実習期間が5日間ということを考慮すれば、ベースの学級を中心にしつつ他学年の参観を取り入れることが適切だと考えられる。

事前の情報交換(受け入れ校の状況も含めて)や話し合いは極めて重要であり、その具体策については早急に用意されなければならない。

(3) カリキュラムの充実

現在のところ栄養教育実習は1単位(30～45時間)である。また、事前事後指導の1単位も不十分であり、このままでは個別指導もままならない。新たな科目設定などの方策が必要だと考える。

4.4. 栄養教育実習の意義

学生から見た栄養教育実習の意義については次の三点にまとめた。

(1) 教育現場でしかできない体験に学ぶ

松田ら(2019)⁽⁴⁾は「教育実習とは、指導教員から教えられて学ぶだけでなく、自ら体験することにより課題を発見し、実感と本音で学ぶ場所である。」(P.195)という。学生は「一人ひとりみんな違いそれぞれにあった指導が必要だった。クラスも一つ一つ雰囲気の違いそれぞれのクラスにあった授業が必要だと思った。」「教師の児童に対する接し方、子ども同士の気遣いなどたくさんを感じることができた。」と振り返った。

(2) 理論と実践のギャップから学ぶ(教育理論や指導技術の獲得)

多くの学生が実習を通してさまざまな教育理論や指導技術を学ぶ。そしてまた、自分が学んだり考えてきたことと学校現場での実践

のギャップに戸惑う。しかしそれに気づけるのは、しっかりと理論や技術を学び、自分のものとして考えているからであり、そこで立ち止まることで新たな理論と実践の獲得が可能になる。学生は「同じ指導案で授業をしているのにクラスによって反応が違う。」「模擬授業などではわからないたくさんのお話を勉強させてもらった。」と書いた。

(3) 教育活動を通じた自己の再発見と成長の場

高田(2009)⁽⁵⁾は「教育実習は人間形成という教育の目的にふれるということであり、それは大学の授業や書物、教室のなかでの模擬授業のようなことだけでは学ぶことはできないことである。」(P.81)と述べている。自由記述させた「栄養教育実習を終えて」の中である。学生は「今まで何をしても自信がなかったのにこの5日間の実習を通して自分に自信をもつことができた。」「苦手なところのある子に寄り添いたい。だから本をたくさん読んで文章を組み立てたり、ポキャブラリーを増やしたい。」と語る。

たったの5日間であるが、学生たちの中には自分の人生の中で貴重な5日間になった学生もたくさんいる。人が変わったように前向きになったり、素直になったりというものもあるが、人が変わったのではなく自分の良いところが押し出されてきたのだろう。

栄養教諭受験倍率は高い(令和3年度大阪府教員採用試験の栄養教諭最終合格倍率8.4倍(前年度10.4倍))ことから現役での合格は非常に難しい。したがって、栄養教諭の免許の取得者がみんな栄養教諭になれるわけではない。むしろ栄養士として学校以外の職場に就職先を求める学生の方が多い。

しかし難しいながらも本学で現役での一次合格者がいること、また卒業後に講師や栄養士として働きながら受験をして栄養教諭として正式採用されている卒業生もいる。本学では毎年ほとんどの学生が教員採用試験を受験

している。栄養教諭免許状を取得して採用試験を経験することは学生の卒業後の進路変更の選択に非常に有効である。

今後も栄養教諭養成においては、学生に対してその役割の重要性や必要性を理解させ、今後の教育内容や方法を検討しながら指導を行い、より優れた人材養成に役立てたいと考える。

参考・引用文献

- (1) 2004 (H16) 年「栄養教諭制度の創設に係る学校教育法等の一部を改正する法律等の施行について」(通知) 文部科学省
- (2) 上村芳枝, 森田清美(2014) 栄養教育実習, 比治山大学短期大学部教職課程研究, 1, pp.133-142.
- (3) 久我周夫(2018) 栄養教諭を取り巻く環境とその課題; 本学卒業生に対する調査による, 大阪夕陽丘学園短期大学紀要, 61, pp.23-39.
- (4) 松田智子, 辻井直幸(2019) 教職の専門性と教育実習の意義, 奈良学園大学人間教育学部, 2 (8), PP.193-200.
- (5) 高田熱美(2009) 「教育の生成」 学術図書出版社, pp.81-89.
- (6) 上田秀樹, 山本早紀子, 最上千知他(2009) 栄養教諭制度における栄養教育実習の現状と課題, 大阪樟蔭女子大学学芸学部論集, 46, pp.63-76.
- (7) 大富あき子(2016) 栄養教育実習の経験による学生の栄養教諭に対する意識の変化, 鹿児島純心女子短期大学研究紀要, pp.57-73.